歴史の意義に關してギリシア思想とヘブライ思想

——京都大學史學研究會講演——

波多野精一

古代(ギリシア)思想と中世(基督教)思想との歴史に對する態度の相異は、ロツツヒ(Lotze, Mikrokosmus. Bd III S. 310 ff)以來しば〳〵學者の注意を惹いた。拙稿は其等の人々に敎へられつゝ、思想史のこの興味深き事實の理解を得ようとした努力の甚だ不充分なる産物に過ぎない。

ヨーロッパ文化に極めて深き影響を及ぼし、其の成立の基礎を置くに與つて尤も力あつた古代の二の民族、ギリシア人とヘブライ人とが、歴史——今こゝでは研究又は叙述としてではなく、客觀的に歴史的生活としての意味に解する——歴史の意義の問題に關していかなる態度を取つたか。歴史的生活の意義の肯定及び理解に對して彼等がいかなる貢献をなしたか。この點に關して少しく考へて見ようといふがこの講演の目的である。近世殊に十九世紀以來歴史學は長足の進歩を遂げ、もはや

好奇心や藝術的趣味を充たすだけのものではなく、もはや過去より推して現在及び將來に處すべき實用的教訓を授ける爲めのみのものでもなく、眞理の爲めに眞理を求める學としての權利と品位とが大體に於て承認されるに至り、又歴史の眼界が廣まつて世界のあらゆる文化的民族を包容し、且つ諸の國民及び國家が孤立の狀態をはなれて共同の生活を營み共通の運命に從ふといふことが、學者や思想家達の理想や空想であるばかりでなくますく明かに現實の事實として吾々の注意を惹くに至り、――歴史又は歴史的生活の意義はますく切に吾々の考慮思索を要求する問題となつた。さてこの問題はこれ又はかれと特殊の歴史を取扱ふのではなく、歴史的生活の一般並に其の全體を對象とするものである故、又次に、かゝる一般的全體的考察は人生の意義の問題從つて世界觀の問題と全く切離し難い故、哲學に於てはじめて學的要求を充たすべき解決を見出し得る類のものに屬する。されば此の講演は、哲學的考察の見地よりして、而して歴史的生活の意義に關係して、ギリシヤ思想とヘブライ思想とを考察し理解し其の業績を批判するを任務とするといひ得よう。この任務を成遂げる爲めには出來得る限り主觀的の感想や好惡に支配されぬやう力めねばならぬはいふまでもないが、されば乍て解釋及批判の眼、識別の標準を缺い

ては哲學的色彩を帶びた問題の論議は全然不可能である。しかし今は私自身の所信を立入つて論述し又は基礎附けする暇なく、單に言表はし又は不言の中に前提せねばならぬを遺憾とする。たゞ歴史的生活の意義の存在をはじめより前提しつゝ論題の考察に向ふといふことだけは、事柄が根本的であるだけに、或は一言の辯明を要するであらうか。抑も吾々は歴史を離れば生活することが出來ない。吾々のあらゆる努力や活動は、何等かの意味又は範圍に於て、歴史に於て乃至は歴史をなしつつ行はれる。歴史の意義を否定する思想の行爲も、自ら無意義として排斥しようとする歴史的生活の一部分を成すのである。

先づギリシア人より始めよう。ギリシア人がいかに轉變波瀾に富んだ歴史を有したか、いかに豐富なる充實したる優秀なる文化を産んだかを知る者は、彼等が歴史の意義を承認するに至らず、むしろ其の世界觀は歴史的生活の特色と價値とを打消す如きものであつたと聞いたならば、怪訝の感に打たれるであらう。しかもこれが明白なる事實であつたのである。抑も一定の狀態に在るとその狀態の意義及び價値を肯定乃至理解するとは別事であり、而してかゝる自覺の缺乏は歴史上他に類例

の少くないことであるが、今はそれ等の點並に其の一般的考察に接近するを避け、單にギリシア思想の反歴史的態度の主なる原因又は理由として、ギリシア思想の歴史的發展の特殊の事情及び徑路と、その思想の根本的特質とについて少しく論究を試みよう。

ギリシア人の精神的指導者、彼等を敎へ戒め思想上彼等を代表した人々は、最初は詩人であり後には哲學者であつた。時を以てすれば紀元前五世紀と四世紀と、人を以てすればソクラテスとプラトンとが、精神的指揮權のこの移轉を具體的に示す境界標であらう。思想上の問題に對して一定の態度を取るをすべての詩人より期待するの誤りであるはいふまでない。然しながらギリシアに於ては、國民の極めて卓越したる精神的素質にも拘らず、宗敎が傳承的習俗國家的儀禮以上に多く出でなかつたこと、また今こゝに立入つて論じ難き其他の諸事情は、詩人をして他の諸國民に於ては通常宗敎家の占めた、國民的敎導者の位置に登らしめた。殊にペルシア戰爭時代及び其に次ぐアテナイ隆盛時代に殆んど踵を接して現はれた三大劇詩人アイスキュロス、ソフォクレス、エウリピデスに於ては、この位置の自信と其に伴ふ責任の自覺とは頗る鮮明又た强烈であつた。劇はギリシアに於ては宗敎的儀禮の重要な

る一要素であつたことを思へば、彼等殊に藝術としての劇の創始者ともいふべき稀有の天才アイスキュロスに於て、宗教的感激が著しく作品を色取つたを見るは偶然でない。

さてかくの如き人格が祖國の光榮を極めたる歴史的時期に出會ひ、其の偉業と隆盛とを目のあたり體驗して、つひに歴史の意義の確信に到達したは當然といふべきではなからうか。正しき神といふ信仰に生きた彼、しかもマラトンとサラミスとに於て祖國の爲めに楯を握つた彼は「ペルサイ」(「ペルシア人」)に於てヘラスの勝利を善の勝利として歌つた。傑作「オレスティア」に於ては彼は、自由なる人民の自治にもとづく自由なる國家の建設に向ふ文化的發展——彼の祖國の誇であり生命であつたこの歴史的發展——に於て正しき神の啓示を見、宗教的信念の立場よりして歴史的生活の意義の解釋を試みた。

然しながら近世の理想主義的歴史哲學の根本思想を或程度まですでに捉へ得た、この大詩人の信念もギリシア人の歴史に對する態度に何等の影響をも及ぼし得ずに了つた。第一に、いかに一定の思想や信念を蓄へ又いかに宗教的情熱に由て動いたとはいへ、彼は其の本質に於て藝術家であり詩人であり、特にまた劇詩人であつた。

思想の宣傳は彼の主なる目的ではあり得ず、又彼自身の所信は何人にも感得されるやうに作品の正面に露出してゞ居なかつた。第二に――これは一層重要の點であるが――アイスキュロスの神はもはや單なる民族的の神ではなく、全能なる正しき世界的の神といふ方向に少からず歩を進めたものではあるが、しかも彼の思想といひ又彼の取扱つた材料といひ、民族や祖國の眼界を超越し得たものではなかつた。ペルシア戰爭の如き世界史的大事件を題材とした場合でさへ、惜しいかな――吾々の論題の見地より見れば實に惜しむべきであるが――彼の歌つたのは、又歌はねばならなかつたのは、祖國の勝利であつた。世界的普遍的傾向は充分に伸び得る遑なく、從つて歴史を包括的なる見地より考察するといふ態度は現はれずに了つた。絶好の機會に遭遇しながら、世界史の觀念、異つた諸民族を包括する共通の歴史といふ觀念の指示す方向には殆んど語るに足る進出をなし得なかつたことは、歴史の意義の問題に關して彼の態度がなほいかに甚しく力と鮮かさとを缺いたかを敎へるのである。

ギリシア文藝の精華ともいふべき劇詩も盛かり短く、ソフォクレスとエウリピデスとが殆ど時を同うして世を去つたと共に、いたましき凋落の運命を見た。同時に

ギリシア文化の魂たる權威と能力とは詩を去つて哲學に移つた。ソクラテスと彼の偉大なる弟子プラトンとに由つて、ギリシアの哲學は人生の意義及び目的を明かにし理想を建設するを最も重要なる任務として自覺するに至り、後のヨーロッパの文化に其の特質及び精神を深く力强く刻み附けた。

かく哲學が人生の意義に關して特に深き興味を抱き、殊に道德政治等共同生活の原理について極めて行屆いた、學的體系的に整つた、深き鋭き論究を遂げるに至つたに拘らず、歷史の意義に關しては全く盲目であつたのは何に由つてであるか。

この問題は決して簡單に無造作に處理し得るものではないが、今はギリシア哲學の最も著しき特徵に屬する一の傾向又は態度に特に注意を向け、之に由つて、最も重要と思はれる點に於て、ギリシア思想と歷史との關係を明にするを力めよう。

ソクラテス以前のギリシア哲學は其の本質に於て物的世界の學的研究であつた。哲學者達は彼等にとつて唯一の世界であつた物界の根柢に於てあらゆる生滅變化運動を通じて永遠に同一なる本質を求めた。彼等を之を phusis (Physis 自然) と呼んだ。すべて特殊的個體的なるものは時に於て絕えず變化或は生滅する。たゞ普遍的なるものゝみ變化若くは生滅を免れることが出來る。かゝる普遍的なるものこ

そ「自然」phusis である。さてこのphusisが先づ永遠に亡びぬ常住的原的なる物的實體に求められたは、研究及び思想の發展に於て當然の順序であらう。然しながら變化又は運動と永遠的普遍的なるものとの兩極を對立、乃至場合によつては、關係せしめた初期の思想家達は原的實體の概念で止り得べきではない。彼等は phusis に於て更に同時に法則を見た。個々物の變化又は運動するは否定し難き事實として認められねばならぬ。ヘラクレイトスの如きはこの點を特に力說して、一切は流るゝ水の如く絕えず動き絕えず去つて一として靜止するものがない、しかもかくの如きこそ世界の眞相と主張した。しかしながらこの流動は己のうちに不變不動なる永遠の規律秩序を宿し居らねばならぬ。何となれば、かゝる法則こそ理性にもとづく言論の對象であり、學を好む者眞理を愛するものゝ努力の唯一の標的であり得るから。ヘラクレイトスは理性及び言論をも意味する語を以て之を「ロゴス」(logos)と呼んだ。換言すれば、個體の運動及變化が力强く肯定された場合にも、個體其もの乃至は其の具體的變化其ものが興味を惹くのではなく、變化一般並に其の普遍的なる法則卽ち具體的個體的內容の超越乃至否定を意味する何ものかゞ識者の唯一の關心事となるのである。個體と變化との世界は永遠の秩序を表現又は映寫して居る限りに於

てのみ顧みられ論ぜられる價値があるに過ぎない。世界はそれが秩序である限りに於てのみ眞に存在するといふべきである。こゝよりしてギリシア人は秩序を意味する語「コスモス」kosmosを以て同時に世界を呼んだ。

今こゝに甚だ簡單に粗略にスケッチしたに過ぎないギリシア初期の哲學思想、其の輪廓の鮮かさ其の內容の充實さを見、而して近世自然科學の思想上の基礎が大體に於てすでにこゝに置かれ居ることを思つたならば、何人も尊敬の念を禁じ難いであらう。然しながら他方に於て吾々の論題である歷史的生活の意義に關しては、其は全き否定を意味した。吾々はむしろその否定が徹底的であり、反歷史的思想の諸前提が大部分すでにこゝに具つて居たのを見て却つて嘆賞の情を加へるのである。すなはち若しこゝに主張されたやうな思想が歷史をなしつゝ發展する文化生活の理解に適用されたならば、普遍的なるもの常住的なるもの法則的なるもの換言すればphusis（自然）のみが語るべき論ずべき唯一の對象となり乃至は眞に存在する唯一の實在となる故、個人にせよ集團にせよ具體的なる個性を具へたものが時間に於て一定特殊の變化、卽ち變化自體又は變化一般ではなく、この特定の他に代るものなき個體的なる變化を遂げること、從つて簡單にいへば歷史は不可能か無意義かでなけ

ればならぬであらう。自然のみのある所では、あらゆる個體又あらゆる時間的變化は普遍的なるもの永遠的なものゝ繰返へし――其自體に於ては特殊の存在理由なき單なる繰返へし――に過ぎぬものとなるであらう。しかもこの永遠の繰返へしといふ思想ほど歴史の意義を無視したものはない。あらゆる努力も活動も畢竟再び直ちに落ち來るべきものと知りつゝ石を山頂に押上げるシヽフォスの勞を繰返へすに過ぎないならば、人生又は歴史の意義について語る餘地はいづこに存するであらうか。しかるにこの慰め無き思想はすでに明かにこの期の哲學者に現はれた。ヘラクレイトスに從へば萬物は世界的理性の必然の法則に從ひ一定の順序を以て源より發し而してまた一定の順序を以て源に歸りつゝ、永遠に週期的に同一變化を繰返へす。ピュタゴラス派の思想家達のうちにはすでにこの思想を特に人間に適用して、全く同じ人々が再び世に現はれ全く同じ働きをなし全く同じ運命に出會ふこと、即ち歴史は嚴密に文學通りの意味に於て繰返へすといふ意味のことを說いた者があつたらしい。

ギリシア初期の自然哲學の著しき特徵をなした、個性及び時間的變化の輕視の傾向は後の哲學諸體系をも依然として支配した。プラトンの哲學的確信の中心をな

したものはイデアの說である。彼は、ソクラテスが終生の目的とした道德的意識の向上及び完成は眞の認識に由て成就せられるを信じ、而してかゝる眞知を概念的認識に於て見出した。概念の內容乃至對象をなすものが卽ちイデアである。經驗の內容が特殊的であり又關係如何により殊に時と共に動き變ずるのとは全く異つて、イデアは普遍的常住的である。眞の認識の對象としてそれはまた眞の實在でなければならぬ。論理學的に見るも形而上學的に見るもイデアは初期の思想家達がphusis「自然」と呼んだものに相當する。

尤も吾々はイデア說のこの方面を、多くの解釋者のなした如く、あまりに重く見過ぎてはならぬ。この說の眞の偉大又其の眞の深みをなすものはむしろ他の方面に存する。ソクラテスの弟子として道德的生活の考察より出發し後數學に親んだプラトンは、概念の內容が經驗に於ては決して完全に實現されて居ないこと、例へば完全なる純粹なる正義又完全なる純粹なる數學的關係は經驗の對象として決して存在しないこと、しかも其にも拘らず、經驗の內容を判斷し批判し評價することは概念に由て行はれること、從つて概念の內容卽ちイデアは經驗に於て事實として與へられないにも拘らず、しかあるべきもの當爲として經驗內容を支配すること——これ

等のことを彼は概念の特質として學んだ。すなはちイデアは經驗的現實界に對しては規範又は價値を意味したのである。同時に其は現實的世界の內容が相對的であり又絕えず變化すると異つて絕對的であり永遠的である。かくの如き自體に於て妥當する永遠なる價値の世界理想の世界を現實的なる存在の世界の上に其を支配すべきものとして主張したことがプラトンのイデア說の眞髓である。彼がイデアの最高なるものとして善のイデアを說いたこと、イデアの本質を特に力をこめて主張し又は說明した諸處に於ては善、美、正等の價値概念が最も重要な位置を占めたこと、彼の終生の最大努力が國家の理想を明かにするに向けられたことなどを合せ考へたならば、イデアを價値と解するの至當であるは明かであらう。かくの如きイデアを世界觀の中心に置いたことに由つてプラトンは實にイデアリスム(理想主義)の祖となつた。

さて今吾々の論題歷史の意義といふ見地より見る時はこの理想主義は極めて重要なる位置を占有する。歷史の中心的內容が人間の體驗努力行爲等であり、其等は自然と區別されて文化と總稱せられる存在の諸領域卽ち例へば政治經濟學問道德藝術などに關係しこれ等を產出するものである以上、換言すれば、歷史は時に於ける

變化であるに相違ないが、單に變化といふに盡きず、自然現象と異つて事實であるといふ以上に吾々の興味を惹き、批判、評價、態度決定を促がし場合によつては吾々自身の文化創造の努力及び行爲を誘ふ類の變化である以上、其は價値實現の過程といふ意義を有せねばならぬ。而して價値の實現は之を其の終極の根源にまで追窮したならば、實現の過程を支配しつゝしかも其以上に在る、或はむしろ其以上にあるが故に其を支配する、從つて時や處やすべての關係を超越して其自身に於て妥當する永遠の價値にまで進み達せねばならぬであらう。かくの如き價値を原理とし其の實現の過程としての意義を得ればこそ歷史的生活は當てもなき盲目的運動でもなく又單に同一事の繰返へしでもなくなり、其の內容の特殊性個性は價値實現の各異る仕方又は試みとして他によつて代られ難き意義を得、從つて其の變化も時と共に新なる生命を表現し、而してかくの如き實在及び變化は相關聯し連續して少くも理想としては人類全體を包括する歷史的生活の全體卽ち所謂世界史を構成するに至るのである。この見地より考察すれば、歷史の意識を理解し得べき原理をはじめて明かにした功績を吾々はプラトンに許さねばならぬであらう。

然しながら惜しいかな永遠的價値の思想は充分に貫徹しなかつた。イデアと經

驗的世界との關係は絶えず普遍と特殊、常住と變化とのそれとして取扱はれた。かくてプラトンはイデアを價値概念にのみ限らずあらゆる普遍概念あらゆる類概念にまで推擴め、「個體の多數が共通の名稱を有する處には吾々はそれに應じてイデアを認む」とさへ言明するに至つた。かゝるイデアが眞の認識對象であり又眞の實在であるならば、特殊的個體的なるもの變化するものは顧るに足らぬもの、嚴密の意味に於ては存在するとさへいひ得ぬものとならう。尤も經驗的世界は事實としては存在する。その存在をプラトンは個體がイデアに「與かる」ことによつて、又はイデアが個體に於て「現在する」ことによつて理解しようとした。しかもこれ等の思想は等しく、普遍的なるものが特殊的なるものに於て何等かの限定のもとに無際限に繰返へされるを意味し、しかもかゝる限定が何等存在の理由を有せぬもの、實は存在す可らざるもの、少くも眞の認識が顧るに及ばぬものである以上、世界の出來事あらゆる個體の時間的變化は永遠なるもの普遍的なるものゝ無際限なる無意義なる繰返へしに過ぎぬものとならう。かゝる世界に於ては有意義なる歴史のあり得ないはいふまでもない。果せるかなプラトンは一著書(Timaios)の中の寓意的の物語に於て、一國民の文化が一定の時期に達すれば天變地異、火災や洪水の爲めに破壞され、歴史

は更に發端より繰返へされねばならぬを說いた。

プラトン以後の思想家たちについてはもはや多く語るを要しない。アリストテレスはプラトンのイデア說を受け、其の最も深みある中心的要素といふべき永遠的價値の思想を極めて稀薄にし、イデアを主として自然力と解し、世界の內容はかゝる普遍的原理が、個體に內在する、變化の原動力として無際限に自己を繰返へす過程に存すると考へた。ストアの思想家たちはヘラクレイトスの思想を受繼ぎ、一元的なる世界の本質「ロゴス」卽ち永遠の理性を一層明瞭に自然力と解し、萬物の變化がロゴスの枉ぐべからざる法則——彼等はそれを運命とも呼んだ——の支配に從ふと說いた。世界及び人生の內容は全く同一なる事物及び出來事の週期的なる繰返へしに過ぎぬといふ、希望の光無き反歷史的なる思想は彼等によつて特に力强く主張された。大體に於て同じ思想はギリシア最後の大思想家プロティノスに於ても現はれた。

かくの如くにしてギリシア思想は終始歷史の意義の否認を以て貫いた。尤もプラトンのイデア說は歷史の意義の理解の爲めに極めて重大なる價値を有する寶を藏して居たとはいへ、其寶は何人によつても彼自身によつてさへも、發見されず珍重されずに了つた。簡單にいへばギリシア思想は歷史の意義を解すべき原理は提供

しながら歴史の意義其ものは否定した。

ギリシア思想に缺けた所のもの、歴史の意義の肯定、有意義なる歴史の發見は、實にヘブライ思想の功績である。

イスラエル民族の文化の精粹は宗教に存した。從つてヘブライ思想について語らむとする者は、主として彼等の代表的宗教家達、彼等の宗教に特色と生命と偉大とを與へた所謂預言者達に就いて學はねばならぬ。これ等の人々は同時に詩人であり、而して彼等の說いた所書き記した所は恍惚たるエクスタシスの狀態に於て直接に神より授かつた啓示、又はかゝる啓示に基いた體驗信仰希望等の表現である故、ギリシアの思想家たちに於けるが如く概念的に仕上げられたる思想に出會ふことは望まれない。吾々は彼等の非概念的なる言表はしの奥にひそむ態度及び傾向の思想上の意義を捉へるを力めねばならぬ。

紀元前八世紀の半頃であつたらう。北の王國イスラエルのヤーヴエ(イスラエル民族の神)の有名なる聖地ベテルに一人の羊飼が現はれ、祭禮の爲めに集ひ來つて宴まさに酣はに歌ひ興じつゝあつた人々を驚かした。これこそ第六世紀に及ぶ偉大

なる預言者たちの列の先頭に立つたアモスである。彼は何をなしたか。彼はヤーヴエの守護に狎れたイスラエルがアッシリア人の爲めに亡ぼさるべきを警告した。しかも驚くべきは、彼に從へばイスラエルのこの最後は決してアッシュール其ものの勝利を意味しなかつたことである。ヤーヴエがイスラエルを亡ぼすのである、イスラエルの神ヤーヴエこそ敵アッシュールを使役して己が守護すべき筈のイスラエルを踏みにじるのである。さてこのことは何の爲めにであるか。イスラエルの不正不義を懲さむ爲めにである。ヤーヴエは祭禮や供物を欲しない。彼の要求する所は正義である。アモスの警告の趣意は大體かくの如きであつた。イスラエルはアモスの警告した通り七二一年つひにアッシュールの手に仆れた。

南の王國ユダは百餘年生き延びた後五八六年バビロンによつて略ぼ同一の運命を見た。この所謂バビロン虜囚の前に現はれた最大の預言者たちイザヤとエレミヤとは、體驗や活動の特色及個性は極めて鮮かなものがあつたとはいへ、大體の態度に於てはアモスと一致した。世界的大國アッシュールもバビロンもヤーヴエの手には一個のかよわき杖に過ぎず、彼等の勝利はヤーヴエによつてイスラエルの頭上に加へられる懲戒の笞であるを信じつゝ、これらの預言者たちは大膽に勇敢に、あら

ゆる無理解、嘲罵、排斥をも物ともせず、祖國の敗北又は滅亡を預言警告した。

さてこの新運動は何を意味するか。預言者達自身は父祖の神をさながらに說くと信じ、又事實彼等の體驗は古き歷史ある民族的宗敎の地盤に於て行はれたに相違ないが、しかも昔ながらのイスウエルの神ヤーヴエは彼等を通じて、其の本質を一層鮮かに發揮しつゝ同時に或意味に於ては全く新しき神と變じた。彼等の神觀の特徵と認むべきものゝ第一は、ヤーヴエは己の自由なる意志を以て何事をもなす、殊に民族の歷史を思ふがまゝに左右する、活きた人格的の神であることである。哲學者たちの說く普遍的常住的なる實體とは異つて、活きた無邪氣なる信仰の對象として、殊に火山の噴火や電光や暴風などの突如として起る猛烈なる現象に特に其の活動を示す神として、ヤーヴエは昔よりして創造的なる生に活き自由なる意志を以て働く人格的實在として表象された。然しながらすべての民族神と同樣にヤーヴエは己の守護すべき民族と、切斷し難き殆んど自然的血緣ともいふべき關係を結んで居た。ヤーヴエあつてのイスラエルであつたが又逆にイスラエルあつてのヤーヴエであつた彼は、或程度までイスラエルと運命を共にせねばならなかつた。イスラエルの勝利はヤーヴエの勝利であるが、又其の敗北は同時にヤーヴエの敗北を意味す

るを免れ得なかつた。然るに今やヤーヴェは殆んど宿命の如く附纏つたイスラエルとの自然的關係を超越し、更に他の諸民族、否一切を併呑する世界的大國の運命をもわが掌中に握るものとなつた。あらゆる拘束繫累を離れて自由に行爲する人格的實在しての神といふ觀念は、かくて遙かに鮮かとなり又遙かに力あるものとなつた。

今ギリシアの哲學者乃至詩人と對照して考察する時、吾々は預言者たちの思想が歷史の意義といふ見地よりしていかに重要なる貢献であつたかを解し得よう。ここでは世界觀の原理が本質上動くもの活きたるもの、わが自由の意志に由つて行爲する人格的實在に置かれたのである。この事は絕えず新なる又た個性を具へたる內容を開展し乃至創造する時間的變化、終極は人格の努力及び活動より發する變化、從つて歷史の中心的內容、の權利を力强く又た原理的に肯定するをはじめて可能ならしめた。ギリシアの思想家達にとつては歷史は、永遠の秩序のもとに絕えず同一事を繰返へすコスモス(世界)に於て、無意義なる端役を演ずる一小部分、識者の顧るに足らぬ一挿話に過ぎなかつたが、こゝでは神の自由なる行爲を直接に啓示するものとして、歷史的生活の意志的特質と其の內容本來の具體性とを保存しながら、人の全

き興味を占領し得るものとなつた。殊に、一民族を守護すべき筈の神が敵の位置に立つ大國を驅使してわが民族の滅亡を計るといふ、當時にあつて實に意外又法外の思想は、歴史の價値を極めて重大ならしめた。歴史はもはや特定の民族又は國家に限界乃至標準を有する比較的に私的なる事件ではあり得ない。諸の民族諸の國家は共通の力に支配され共通の運命に出會ふが故に歴史は包括的普遍的意義を有する天下公の事柄となる。諸民族諸國家間の牆壁を打破しつゝ帝國主義の世界政策を行つたアッシュール、ブビロン等の諸大國の發生又は存在といふ、文化のあらゆる方面に重大なる影響を及ぼした事實が、勿論背景及び基礎をなしたに相違ないが、ここに死海のほとりの荒野に牧羊に從事した眇たる一農夫の宗教的體驗に於てはじめて世界史の觀念の萠したことは、思想史上特筆すべき出來事である。

然しながら歴史が自由に行爲する人格的なる神によつて支配されるといふだけであつて、其神の行爲が單なる氣儘勝手以上に出でないならば、歴史は終極は無意義なる出來事の無意義なる連續であるを免れ得ないであらう。幸にも預言者達の神觀の第二の特徴はこの困難を免れしめる。すなはちヤーヴェは正義を欲する神であるといふが彼等の第二の根本思想であつた。しかもこれこそ彼等に於て最も獨

創的なる又最も本質的なる思想であつた。ヤーヴエは正義の神であればこそ、卽ち一定の普遍妥當的なる理想を貫くを目的とする實在であればこそ、彼の自由なる意志は一民族の利己心や外的繁榮の欲求などによつて拘束されず、わが愛兒たるイスラエルとの深き自然的因緣にも打勝ち、而してあらゆる民族いかなる大國をも思ふがまゝに驅使する權利を保有するのである。神の道德的意志の實現を說いたことによつて預言者達はゝじめて歷史の權利と意義とを肯定し又確固たる基礎の上に置くを得た。

尤も歷史の意義の肯定は、更に立入つて考察すれば、一方に於ては神と歷史以外の世界との關係を一層明かにすること、又他方に於ては歷史の世界を一層廣く見渡すことを要求するであらう。虜囚前の預言者たちの思想を受繼いで、之に各自の個性に從ひ又時代の要求に應じて新なる趣を與へつゝ、一層徹底的に開展したものは、バビロン虜囚時代に働いた預言者達殊に所謂第二イザヤ書(イザヤ書四〇章—五五章)の著者である。イスラエルの懲戒はすでに成遂げられた。預言者たちの警告した如く南の王國ユダさへもつひに滅びた。國民はバビロンに移住を强ひられて流竄の憂き目を見て居る。預言者の任務は勢ひ警告より轉じて慰籍に向はぬを得なか

つた。「第二イザヤ」の著者は第三の世界的帝國の建設者ペルシア王キュロスを救濟者としてよろこび迎へた。ペルシアによつてバビロンは亡ぼされ之に反してイスラエルは救はれ歸國し更に光榮ある將來を見るであらう。イスラエルをアッシュールやバビロンの懲戒の笞に委ねたのが神の正義であつた如く、今やキュロスを使役して其を救濟するも亦同じ正義の働きでなければならぬ。イスラエルのみ獨り眞の神を知るものであるが故に。然しながらこの特權は同時に特異の責任と任務とを伴ふ。イスラエルは「ヤーヴェの僕」として眞理をあらゆる民族に敎へ、萬民の光として世界を敎化し精神的に支配せねばならぬ。而してヤーヴェはこの重任を成遂げしめるであらう。眞理の勝利は同時にヤーヴェの勝利、しかもこゝにこそ世界史の目的及び意義は存するのである。かくの如き偉大崇高なる事業を成遂げしめ得る者としてヤーヴェはまた天地の創造者、一切の始であり同時に終である、全能なる唯一神でなければならぬ。猶太敎の著しき特徵をなした其の倫理的一神敎はかくして歷史の意義の考察より生まれた。尤もこゝにイスラエルは神の愛兒、撰ばれたる民といふ意識は虜囚以前に比して一層明かに現はれたに相違ないが、しかも又他方に於て其の責任の意識も一段の强烈を加へ、共通の目的に向ふ諸民族の共同の

歴史といふ觀念、又その歴史の終極の意義の意識も遙かに明確となつたことは何人も否定し難いであらう。

預言者達の思想は後のキリスト敎の思想の基礎をなし、又其に於て完成を遂げた。今は立入つて論ずる暇が無いが、吾々の論題の見地より見て後者に於て特異點又進歩と見るべきは、大體に於て次の二つである。キリスト敎に於ては猶太人固有の民族中心主義は全く跡を絶ち純然たる世界主義が行はれるに至つた。神の前にはもはやユダヤ人もなければギリシア人もない、一樣に神の子たるべき特權と責任とを有する人間があるのみである。かくてあらゆる個人を包括した人類並にその人類の歴史といふ思想は一層確實なる事實上の根據を得、又理想としても遙かに力あり生命あるものとなり得るに至つた。次に、預言者に於て又猶太敎に於て單なる希望の對象であつた世界歴史の目的がキリストの出現と共に少くも原則に於ては實現を見たと信ぜられたことは、意義ある歴史といふ思想を一層明確に又堅固にした。ヘブライ思想が歴史に對してギリシア思想と如何に異る態度を取つたかは、キリスト敎と殆ど時を同うし又等しくヘレニスティク及びローマ時代の世界的文化を背

景としたストアの哲學が、世界の市民といふ觀念には達しながら世界の歴史人類の歴史の觀念にまでは登り得なかつた事實によつて何よりも明かに又具體的に示される。

然しながらこれ等兩種の思想は本來互に相補はるべきものであつた。ヘブライ思想は歴史の意義を力强く肯定したものゝ概念的明確を以て之を理解し又は言表はす手段を缺いた。其は宗教的世界觀の範圍を出でなかつた。しかるに他方に於てギリシア人は「ロゴス」の概念に於て世界の本質として從つて自然並に人間界の出來事を支配する原理としての理性の思想を有しながら、而して特にプラトンはかゝる理性の內容として最もふさはしき、永遠の價値としてのイデアを說きかくて歴史の意義を理解し得べき概念の器は握りながらつひに歴史の意義の否定に終始した。それ故これ等兩種の思想の接近及び結合は、一般文化史一般思想史の見地よりはいふに及ばず、歴史の意義の肯定及ひ理解といふ吾々の論題より見るも極めて重要なる興味深き歴史的事實といふべきである。ペルシアに代つて世界的帝國を建設しようとしたアレキサンドロスの事業は政治的には失敗に了つたものゝ、ギリシアの學藝及び思想を世界的勢力たらしめるには成功し、かくして生れた所謂ヘレニステ

イク文化の地盤に於て、ローマの成就した世界統一に助けられつゝ、ギリシア思想とヘブライ思想とはつひに結合を遂げた。ギリシア哲學思想を代表する「ロゴス」と「イデア」との二つの重要なる思想は、甚だ不完全ながらアレキサンドリアのユダヤ人フィロンの「ロゴス」說に於て相結び附き、その形に於て更にキリスト敎と結び附いた。「ロゴス」の概念は宗敎的體驗を言表はす手段としてすでに所謂ヨハネ傳福音書に取容れられたが、降つて第二世紀の半ばよりは其の哲學的意義も意識されるに至つた。ギリシア哲學とキリスト敎との融合といふ文化史上重大なる意義を有する事業に着手したのは普通「敎父」(「敎會の父」)といふ名にて呼ばれる人々である。

歷史哲學的思想の其後の興味深き發展は今は割愛せねばならぬ。この方面に於ける近世思想の偉大なる貢献について語り得ないは私の特に遺憾とする所である。然しながら今日苟くも歷史の意義について思索しようとするものは、現代の思想が古代の特色ある彼等二大民族に負ふ所少からぬを思ひ、すべて年若きものに固有なる率直と純潔とを以て體驗され主張され、而してギリシア人の場合には他に類ひなき美くしさを以て言表はされた典型的價値ある彼等の思想に就いて學ぶを忘れてはならぬ。